

# 沖縄の自治会と自衛隊基地 (2)

—陸自配備計画と宮古島の地域社会—

相愛大学 藤谷忠昭

## 1 目的

沖縄の基地は米軍を中心に議論されるが、地域社会への影響は約 40 箇所ある自衛隊施設について検討することも重要である。本報告では、宮古島での現状を把握し、地域社会への影響を検討する。

## 2 方法

宮古島の地域社会の現状を概観した後、現存する、また新たに計画されている自衛隊基地の地元への影響を分析する。とりわけ地域の核としての自治会に着目し、主に自治会長からのヒアリングに基に、集団論、記憶論などの知見を援用しつつ、基地と地域社会の関係について検討する。

## 3 結果

宮古島市は6つの有人島、41か字からなり、2005年に平良、城辺、下地、上野、伊良部の5市町村が合併し、誕生した。54,519人の人口(2015年)は徐々に集中し、現在、平良地区に人口の7割が居住している。宮古島では復帰後、アメリカ軍基地の返還跡地が航空自衛隊基地として運用されてきたが、新たに陸上自衛隊基地の配備が計画され、政党、市民団体、地域が交差しつつ賛成、反対の活発な議論が展開されている。2017年2月の市長選でも争点となり、誘致容認派の現職市長が勝利した。ただ、配備地自体は未決定にとどまり(2017年6月現在)、候補地になった地域では、その影響について期待、懸念が錯綜している。

福山区は平良地区の北部に位置し、候補地のひとつであった大福牧場が存在した。その後の調査で地下水汚染のリスクが浮上し撤回された。復帰後、大地主の土地を買い取って、苦勞し集落をつくりあげてきた。戦争時代の壕があって、見張りのための日本軍の戦跡がいまも残っている。地区として強い反対の声は上がらなかったが、配備が決まったら、地域はどうなるのかという懸念を聞いた(2015年9月)。

野原区は上野地区に位置し、航空自衛隊基地の南側に接した集落を形成している。米軍時代は飲み屋もあったが、いまは集落に店はない。既存の自衛隊との交流もある。しこりが残らないように地元の意見をまとめたいが、公民館の再建、災害時の迅速な対応などメリットも想定される一方で、デメリットはできてみないと分からないという(2015年9月)。説明会などでの活発な議論の後、反対の表明をしている。

千代田区は上野地区に位置し、農耕地が広がる中、新興住宅が増えつつある。80年代に建設されたゴルフ場が新たな基地の候補地になっている。集会所でも防衛局による説明会が行われた後、地区としては反対を表明した。ただ、誘致賛成者もあり、一致はみられないまま、候補地のボーリング調査が進んでいる(2016年9月)。

## 4 結論

自衛隊基地の存在、建設計画は地域社会に対して大きな影響を持つ。必ずしも賛否は一枚岩ではなく、戦時、戦後の記憶も一樣ではないが、局所としての地域の意思の表明母体として自治会は機能している。南西地域へ配備が進む中、地域社会の影響についての比較、検討は、今後の重要な課題である。

### 文献

藤谷忠昭, 2017, 「沖縄の地域社会と自衛隊」『相愛大学研究論集』33: 19-32.

———, 2017, 「沖縄と自衛隊(3)」『沖縄県の自衛隊及び米軍所在自治体における地域アソシエーションの実証的社会集団研究』研究成果報告書 1: 13-24.